

火のある暮らしの 復権を

大阪ガス エネルギー・文化研究所

所長 真名子 敦司

Written by Atsushi Manago

人間の進化と生活を

支えてきた火

人間は火を支配することを学び、火によって進化し、文明を築いてきた。

アフリカで人類の祖先が誕生したのは四〇〇万年前といわれている。その後の長い進化の過程において最大の変化は、火の発見によってもたらされた。大脳生理学者の大島清は「火で焼いた食物を咀嚼することが脳を刺激し、二倍に大きくなったのである。その結果、言葉が生まれ、文字ができ、文化が育まれた。」

火は農業、狩猟、漁労にも利用され、火を使った精錬加工技術の習得とともに様々な道具が生み出された。そして、一八世紀の蒸気機関の発明と、それに続く発電機や内燃機関の出現によって、今日の文明社会の基礎が築かれたのである。

二〇〇〇年の世界における一次エネルギー総供給のうち、化石燃

料は約九割を占める。我々が利用するエネルギーの大部分は火なのである。火は我々の社会を支える基盤であり、我々の生活は火と無縁では成り立たないといつても過言ではない。

生活の中で見えなく

なりつつある火

古代人の焚き火以来、近代に至るまで調理、採暖、照明には全て火が利用された。近代になって照明が電灯に変わった後も、少し前までは風呂釜、かまど、囲炉裏、炬燵、火鉢、ストーブなどが使われ、生活の中に火があるのが当たり前だった。その後、機能性や利便性に対するニーズの高まりを背景に、燃料の変化や器具の発達にともなつて、火は急速に我々の目から隔離されていった。今では家庭での暖房はファンヒーター、温水暖房機、エアコンが主流である。使うエネルギーは都市ガス、灯油、電気と様々だが、直接火を見ることはない。

近年、電子レンジや電磁調理器の登場によって、台所にさえ火のない家が出現しつつあるといつ。一方で、次の時代の担い手

として、火を知らない世代が生まれ育っていくことを危惧する人も多い。

囲炉裏とともに

失われた暮らし

焚き火やキャンプファイアなどの炎を見て、郷愁や休息感を覚えた経験のある人は多いと思う。火には安らぎや癒しといった我々を惹きつける何かが存在するようだ。闇の中で火を点けると、薄明い空間が作り出され、自然に人が集まり会話がはずむ。火は集う人々のコミュニケーションを促進し、親密度を増進する作用を持っているようだ。この作用が、かつての囲炉裏を囲む一家団欒や欧米の暖炉を前にした家族の光景と重なり合う。

かつて囲炉裏のある家では、囲炉裏が家の中心だった。炉辺は食事や採暖や団欒の場であり、家族が絆を結ぶ空間だったのである。山口昌伴はその著書「日本人の住まい方を愛しなさい」の中で、囲炉裏は今の家庭でダイニングルームに置かれているテレビとは似て非なるものだといつ。かつての囲炉裏の火は集いの真中にあ



つたが、現在の家族の視線は家族の輪の外を向いていると指摘する。

ちなみに欧米では、暖炉が今も健在であり、生活の中に根づいている。セントラルヒーティングによる暖房が施されているリビングルームにさえ暖炉が設置され、熱源は電気やガスでありながらイミテーションの炎が揺れる暖炉もある。彼らが暖炉に求める機能は、暖を採るという実用性だけではなく、火が持っている情緒的、精神的な求心力なのだ。まさに、囲炉裏の存在と共通している。

我が国ではこれまで、機能性と利便性を重視するあまり、囲炉裏を手放すとともに囲炉裏の火が支えてきた暮らしの重要な部分まで失ってしまったように思える。

守り続けたい食文化

我が国では、食事は暮らしの中の重要な位置を占め、生活文化の一部になっている。

近代になつて、海外から次々と新しい料理が入ってきた。料理とともに、様々な調理器具も入ってきた。しかし、我が国の伝統的な料理はなくならないし、固有の調理器具も廃れない。日本人が家庭でつくる料理と台所で使う器具の種類は世界で最も多いといわれている所以でもあり、これが我が国の食文化なのだ。

火を使わない調理器具が登場した今も、調理の火にこだわる人は圧倒的に多い。

食事の場所が、囲炉裏からちゃぶ台へそしてダイニングテーブルへと変わっても、毎年肌寒くなる頃には火にかけた鍋料理が人気を博す。古代人さながらの直火による焼き肉や焼き魚はいつこうに廃れない。今、ご飯の量に関係なく美味しく炊ける土鍋の人氣が上昇中だそう。

一方で最近、火のない安心感や掃除のしやすさなどからIHクッキングヒーターが目されているという。火がないとしても加熱器具であることには変わりがなく、取り扱いの注意を怠ると危険であり、火がない分、これまでと違った注意も必要となる。火のある器具も火のない器具も、安全を確保するためには適切な使い方をすることが肝要だ。

また、我々の生活の様々な部分が次々と市場経済に組み込まれていく中で、家庭の食さえ外部化しつつある。このような傾向に対して、歴史学者のフレイバ・フェルナンデス・アルメストは『食べる人類誌』でファーストフードと電子レンジが調理の文化を壊そうとしていると批判する。北イタリアの小さな町で生まれたスロフード運動が今世界的に急拡大しつつあるがまさにこうした傾向に対してアンチテーゼを投げかけているのだ。

我々にとって最も重要なことは、調理器具の機能性や利便性を追及するあまり、暮らしにおける食本来の目的を見失ってしまわないことである。囲炉裏と同じ轍を踏むことなく、これまで育んできた食文化をしっかりと守っていききたいものである。

見直されている 火のある暮らし

前出の山口昌伴は、現代の住空間に伝統的な文化をうまく取り入れた手本として欧米の暖炉をあげる。おりしも我が国では、最近、暖炉や薪ストーブがブームになりつつあるという。排気ガスの処理も施されており、都心の住宅地でも安心して使えるそう。かつて囲炉裏が果たした役割を暖炉や薪ストーブに託そうとしているのだ。

我が国では、照明といえば蛍光灯といふぐらい蛍光灯が普及しており、天井に取り付けて部屋全体を明るくするのが一般的である。省エネルギーは進んだかもしれないが、何かを置き去りにしてきたように思える。一方、欧米の家庭ではオレンジ色の白熱灯にこだわり、装飾の美しい電気スタンドを部屋の隅に置いて昼間とは異なる雰囲気を出している。これは、暖炉やキャンドルなどの自然な火の光を頑なに守ってきたことと通じる。我が国でも最近、白熱灯のダウンライトや間接照明、キャンドルなどを採用したレストランが増えており、家庭でもこうした照明を見かけるようになった。

最近、ガス灯のよさが見直され、都市の景観づくりの一環として街灯や門灯などへの利用が広がっている。合理性最優先の従来の発想からすれば、街を明るくするためには蛍光灯を設置するのが最も効

かい明るさと醸し出される雰囲気の人気を呼んでいるようだ。

火を見る機会がなくなりつつある一方で、経済合理性からは必ずしも必要とはいえない暖炉、ガス灯、キャンドルなどが関心を集めているのである。忘れかけていたものを取り戻すために、火のある暮らしが見直されているのだ。

失われた暮らしの 復権に向けて

山口昌伴は、我が国の機能第一主義の住宅事情に疑問を呈し、日本人がこれまでに失ってきた住まい方の再評価をすることを提唱している。そして、家族間のコミュニケーションの媒介として、住まいにおける火の役割を見直すべきだと主張する。

彼はまた別の著書『図面を引かない住まいの設計術』の中で、文明の発達とともに生活が不自然になってきたと指摘する。文明が発達したから自然体の暮らしがなくなるのではなく、文明が発達すれば、そういう暮らしを手に入れやすくなるように技術の方向を見直すべきだと主張する。堂々と本物の火を入れる暖炉、本物の火が熾きている火鉢、本物の火で秋刀魚が焼ける台所。こつした要望に込めるのが設備設計の本来の役割であり、

今、建物や設備の設計の哲学が問われているといふ。

井形慶子は著書『古くて豊かなイギリスの家 便利で貧しい日本の家』の中で、建築家のアイデアとハイテクノロジーの詰まった日本の家は便利で機能的ではあるが、冷たく味のない単なる建物であり、決して住み心地のいい家とはいえないと批判する。

住まう技術とは家族がともに暮らす技術である。家族をまとめる象徴的なものとして、今、火が見直されつつあるのだ。一部ではすでに、失われた暮らしの復権に向けて、火を囲むこと、それに適った設備と住まいをつくるのが試されている。

このような動きは、これまでの機能最優先の発想とは逆行するものであり、省エネルギーや安全性などの新たな課題を内包しているかもしれない。しかし、その解決が失われた貴重な暮らしの復権に必要な、大いにチャレンジすべきであろう。

当社は、燃料として都市ガスを供給するとともに、様々なガス器具を提供することによって、まさに火のある暮らしを支えてきた。今や、器具の性能や機能は世界に誇れるまでになったと自負できる。他方、効率や利便性を追及する陰で忘れてきたものはないだろうか。検証が必要かもしれない。

詩人の山尾三省は子供たちに向けて、同時に何かを見失ってしまった大人たちにも

向けて、次のような詩を書いている。

(前略)

人間は

火を焚く動物だった

だから 火を焚くことができれば

それでもう人間なんだ

火を焚きなさい

人間の原初の火を焚きなさい

やがてお前達が大きくなって 虚栄の市

へと出かけて行き

必要なものと 必要でないもの見分け

がつかなくなり

自分の価値を見失ってしまった時

きつとお前達は 思い出すだろう

すっぽりと夜につままれて

オレンジ色の神秘の炎を見詰めた日々の

ことを

(後略)

